



ザーライ便り第11号

2010年5月発行

本邦研修特集号



中部高原地域における貧困削減のための参加型農業農村開発能力向上プロジェクト(通称「ザーライプロジェクト」:2009-2014)は、ベトナム中部高原に位置するザーライ省マンヤン郡において、住民参加型アプローチを導入した生計向上のための普及活動を通じて、住民、地方行政の農業農村開発能力向上を目的としています。

本プロジェクトの背景としては、ベトナムは近年、著しい経済成長を遂げているものの、都市と農村の格差、多数民族と少数民族の格差が拡大傾向にあります。ザーライ省を含む中部高原は少数民族の比率が高く、住民の大多数は農業に従事しています。ベトナム政府は、格差是正のために多くの政策を実施していますが、トップダウン型の画一的な政策が多く、少数民族の独自性への配慮不足から期待されている効果的な成果を十分にあげることができておらず、改善の必要性を認識しています。

このような状況から、本プロジェクトはザーライ省マンヤン郡において、少数民族の独自性を考慮した住民参加型の普及活動を通じ、住民、地方行政の農業農村開発能力向上に取り組んでいます。また、プロジェクトで得られた優れた実践や教訓を農業農村開発省の政策に反映させ他地域へ適用することも念頭に、中央省庁、省とも連携をとりながら活動を行っています。

プロジェクト初年度(2009)は、ベトナム側のプロジェク

ト承認やカウンターパート予算、PMU設立などプロジェクトの実施体制を構築するとともに、現場では集落でのワークショップを開催し、カウンターパートへ住民参加型アプローチを實踐で示してきました。また、ホーチミン市国家大学ベトナム・東南アジア研究センターや短期専門家(文化人類学者)による少数民族(バナ族)の社会文化調査も実施され、プロジェクト活動に有益な情報が収集されました。

2010年は、集落における生計向上のための活動を中心に取り組んでいます。プロジェクト初年度に集落ワークショップを通じて得た住民の意見や社会文化調査報告に加えて、PMU及びマンヤン郡人民委員会専門部局からなる支援グループの意見を加えて住民と活動計画を策定し実践しています。

今月は5月12日から6月2日まで実施された、カウンターパート職員を対象にした日本での研修(本邦研修)の様子を各参加者の報告会発表内容やDaily reviewをもとに特集でお伝えします。

<本邦研修参加者と日程>

本プロジェクトでは5年間のプロジェクト実施期間中に、1年に1回、少なくとも3回の本邦研修を予定しています。本邦研修の目的は、主要なカウンターパート職員を日本に招聘し、集中的な講義や実践視察を通じてプロジェクトに関連する概念や活動の理解を促進し、プロジェクト活動に寄与することです。

本年度の本邦研修は第2回目となり、「農村開発における地方行政の役割」を理解するために2010年5月12日から6月2日まで21日間実施されました。研修参加者はザーライ省人民委員会及び専門部局から3名、マンヤン郡人民委員会及び専門部局から2名、国立農業計画立案研究所(NIAPP)から1名の合計6名が参加しました。

参加者名簿:

1. Mr. Kpã Thuyên-ザーライ省農業農村開発局 局長
2. Mr. Đỗ Lê Nam-ザーライ省人民委員会外務室 室長
3. Mr. Lê Tiến Anh-ザーライ省計画投資局対外経済室 室長
4. Mr. Nguyễn Như Phi-マンヤン郡人民委員会 副委員長
5. Ms. Phan Thị Dung-
マンヤン郡人民委員会農業農村開発室 副室長
6. Mr. Nguyễn Thanh Hà-NIAPP職員

日本側の受け入れは、京都市にある龍谷大学の河村教授(農業経済学:表紙写真)にお願いし、京都府の農村開発政策とその実践を組み入れたカリキュラムを作成していただきました。また、農業を営んでおられる原口専門家のご実家(岡山県)で農業体験とホームステイをするプログラムも組み込まれました。

研修日程:

- 5月12日 来日
- 5月13日 JICAオリエンテーション
- 5月14日 研修オリエンテーション
- 5月15、16日 週末
- 5月17日 日本の地域農業開発(河村教授)
- 5月18日 自治体農政と地域農業開発(京都府)
- 5月19日 視察:農業技術開発と普及(京都府)
- 5月20日 視察:農家と行政支援(福知山市)
- 5月21日 1週間のまとめ(木下)
- 5月22、23日 週末
- 5月24日 「参加型地域社会開発(PLSD)」の理論と方法(大濱教授)
- 5月25日 参加型農村開発と行政の役割(長畑氏)
- 5月26日 視察:生活改善-農産物加工・産直・道の駅
(鎌谷中もえぎグループ企業組合)
- 5月27日 大学連携都市開発(龍大大津エンパワー・プロジェクト)
参加型農村開発のJICAプロジェクト
-タカラール・モデル(河村教授)
- 5月28日 1週間のまとめ(木下)
- 5月29、30日 農家との意見交換、ホームステイ(森田家)
- 5月31日 移動
- 6月1日 農林水産省表敬訪問、JICA本部訪問(評価会)
- 6月2日 帰国

ザーライ便り第11号(2010年5月発行)

<何事にも貪欲に学ぶMr. Phi>

今回の参加者6名中、最も積極的に研修から学んだのはプロジェクトダイレクターのMr. Phi(マンヤン郡人民委員会副委員長)でした。日々のDaily reviewには、その日の講義や視察に対する意見やプロジェクトで活用する提案が用紙(A4)にびっしり書かれています。



例えば、日本の地域農業開発の講義(5月17日)では、高度経済成長時の環境汚染(水俣問題など)が紹介されたため、環境問題に強い関心を示しました。マンヤン郡で操業しているキャッサバ加工工場の廃棄物が川に流されており環境評価が必要であることや、郡への企業誘致を進めているが環境保護の視点を怠ってはいけないとの意見が出されました。農業部門では、防虫剤、除草剤を使用しないIPM(Integrated Pest Management)手法を用いたモデルサイトがあるが、資金不足もありあまり普及していない。これまでの結果や実績を評価し、プロジェクトに活用できるのではないかと提案がありました。

京都府の農業技術開発と普及視察(5月19日)では、品種保存から市場に広がるブランド形成まで支援した伝統野菜の維持政策において、補助金の活用方法が参考になったようです。「マンヤン郡の隣に位置するダッ



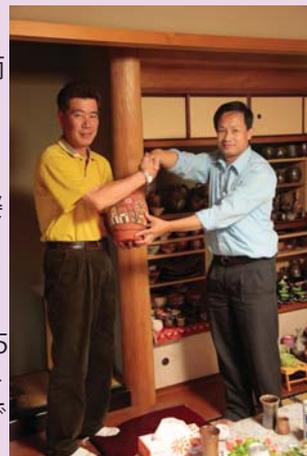
本邦研修での講義の様子(5月25日)

クダア郡にはベトナムで一番おいしいと言われるレカン芋があるが、1haあたり1,500万ドンしか収入がなく、1haあたり5,000万ドンの収入が見込めるゴムの木栽培への転作が行われている。そのためレカン芋は絶滅の危機にあり、「京野菜」のような行政の補助が参考になる」との意見が出されました。

また、長畑氏による参加型農村開発と行政の役割(5月25日)のDaily reviewには、「人々を遅れているとけなすべきではない。歴史は人々によって作られたのだから、人々のためにできるだけことをしなければならぬ」と記されていました。これまで会議などで「バナ族の水準は低い」など、恐らくは悪意なしに語っていたと思われませんが、行政として人々をけなすべきではないとの認識に変わったことは特筆すべきことであると感じました。

以上のようにMr. Phiは熱心に本邦研修に取り組んでいましたが、来日初頭から右足首に腫れができ、次第に両足首が腫れたため靴も履けない状態になりました。研修を途中で中断し病院で点滴をすることになりましたが、配布資料を読み、後ほど質問をする姿は他の研修参加者へも大きな影響を与えたと思います。

足の痛みもありましたが、岡山県での農家との意見交換、ホームステイ(5月29、30日)も同行し、全ての日程を終えました。まずは病状を完治し、日本で学んだことをプロジェクトや通常業務で活用することを期待します。



原口専門家のお父様へ記念品贈呈

<唯一の女性研修参加者Ms. Dung>

本邦研修は今年で2回目になりますが(1回目は2009年10月実施)、Ms. Dung(PMUメンバー)が初めての女性研修参加者でした。研修当初は「日本とベトナムの行政システムが違うから」や「ベトナムの農業は日本ほど安定して生産できないから」と日本の農政や農業に戸惑いを感じていたようでした。しかしながら、時間が経つに従い、また、研修トピックが自身の業務範囲である農村開発に及ぶに従い学び取ることが多くなったように思います。



長畑氏による参加型農村開発と行政の役割(5月25日)では、「どうすれば住民が主体性を持って活動に取り組むか」に対するヒントを得たようです。これまで住民からあがってくる問題や要望を「実施する活動」に転換していたものの、住民の主体性が見られないことに不満を持っていました。ワークショップを通じて、Problem(地域に存在する問題)とIssue(解決する必要性のあ

る問題)を混同していたことに気づいたようです。プロジェクトへの提案として、「Problemではなく、Issueを見極めて支援する活動を決定すべきである。そのことにより、住民の主体性が得られる」と述べています。

5月26日に生活改善視察で訪れた鎌谷中もえぎグループ企業組合(女性のグループ)では、長期間の試行錯誤を経て地元の伝統産物を活用した商品「大納言ぎんづば」を成功させた経験談に感動した様子でした。生産工場視察では、実際にぎんづば作成を体験し、賞味する機会にも恵まれました。Daily reviewには、バナ族にもコムランと呼ばれる竹で蒸したご飯や焼き鳥などの特産物や織物などの伝統工芸品があり、もえぎグループの成功例はプロジェクトサイトでも参考になるのではないかとこの意見が出されました。



ぎんづば作りに挑戦するMs. Dung

<再発見!日本文化コーナー>

日本の文化を共有している者同士ではあたりまえと思っていることでも文化が異なる人からの何気ない質問に答えるのが難しいことも多々あります。本邦研修を同行引率し、ベトナム人研修員が来日して発見した日本の文化を紹介したいと思います。

その1:列にきちんと並びます!

研修宿泊先のJICA大阪で朝食を食べた時のこと。朝食はbuffet形式で人が多い時には順番に並びます。少し後に来た研修員が知り合いが前にいるからと先に行くと…割り込みと思われるので「順番に並んでください」と言われました。日本人は順番をきちんと守ります。

その2:生卵を食べます。

龍谷大学の河村教授が研修員を夕食に誘っていただきました。日本の食事がいいだろう、とのことですが焼き焼きを選んでいただきましたが、鍋で煮た肉や野菜を生卵につけて食べるのには研修員も戸惑いました。「日本にいるので日本の文化に習う」と食べてみましたが、おかわりは?と2つ目を促すと「もう十分!」との回答でした。皆さんお腹を下さないか心配だったようです。



すき焼きに挑戦のMr. Thuyen

ザーライ便り第11号(2010年5月発行)

＜ザーライ省関係機関からの研修員Mr. Nam、Mr. Tien Anh＞

Mr. Nam (ザーライ省人民委員会外務室)とMr. Tien Anh (ザーライ省計画投資局)は直接プロジェクトに関わるカウンターパートではありませんが、プロジェクト責任機関であるザーライ省人民委員会の専門部局でありプロジェクトを総合的に評価する重要な役職の2人です。2人ともこの研修を通じてザーライプロジェクトが目指すもの、そのアプローチを知りたいと述べていました。

結果は2人とも目標を達成することができました。Mr. Namは報告書の中で、「農村開発事業において成功を決する要因のひとつは住民の参加である。行政と住民が同じ目線に立つ“パートナーシップ”に基づいて見つけ出した問題には住民が主体的になって解決にあたるであろう」と述べています。



Mr. Tien Anhは、JICA本部での評価会(6月1日)でザーライプロジェクト開始に至るまでの苦労を渡辺職員(当時JICAベトナム事務所)と共有し、プロジェクトが順調に進んでおり本邦研修で日本に来れたことに感激していました。プロジェクトへは側面支援にとどまる



ものの、行政手続きやC/P予算支出に関してザーライ省人民委員会に前向きな進言を行っていきたくいと述べました。

トラクター試乗にも挑戦のMr. Tien Anh

＜NIAPPの若手職員Mr. Ha＞

Mr. Haは2009年9月から7ヶ月間、本邦研修出発の直前までマンヤン郡のプロジェクト事務所に派遣されていました。彼が派遣されていた期間は、プロジェクトが各集落を巡回し住民と集会を持ちながら集落行動計画を策定しており、まさに参加型アプローチのプロセスの最中でした。そのこともあり、本邦研修参加への問題意識は日本の地域開発がどのように為されているかを学ぶことでした。短期間で多くの知識や情報が与えられたために理解を深めるのに時間が必要かも知れませんが、研修終了後時での報告では次の3つが特に印象に残っていると述べています。



1つ目は、「参加型地域社会開発(PLSD)」の理論と方法(5月24日)の講義で「アリの目とトリの目」の視点、つまりミクロ的視点とマクロ的視点の重要性です。また、7ヶ月間のマンヤン郡での経験では住民との距離が常に遠かったとの反省から、行政職員であっても内部者のように振舞うことによって住民の意見や要望を得や

すくなると感じたようです。

2つ目は、生活改善視察で訪れた女性のみで構成されている鎌谷中もえぎグループ企業組合への訪問(5月26日)です。10年もの長い苦難を乗り越えた細井代表の強い意志に感銘を受けたようです。

3つ目は、参加型農村開発のJICAプロジェクト:タカラル・モデル(5月27日)の成功モデルがザーライプロジェクトにも活用できる、とのことでした。

まだまだ具体的に活用提案をできるまで理解が浸透していない面もありますが、今後様々な経験をして知識を実践に取り入れることができよう応援したいと思います。



農家との意見交換ではトラクターにも試乗

＜ザーライ省農業農村開発局(DARD)局長Mr. Thuyen＞

プロジェクトの成果を他地域に展開することを目標としている我々にとって Mr. Thuyenの本邦研修参加は大きなインパクトがあります。プロジェクトが住民参加型アプローチの農村開発に取り組んでいる時期に、その概念や日本の経験を知ることは後々にプラスになるでしょう。昨年の本邦研修に参加したPMUメンバーのMr. Bo(ザーライ省DARD)に加えて、心強い理解者が増えました。



研修時も熱心にメモを取り、質問をたくさんしていました。特に、行政職員の指導、管理方法についての意識が高いことがDaily reviewや報告書から伺えます。今後、プロジェクトで行う行政職員の能力向上についての取り組みを効果的に伝えていきたいと思ひます。

また、日本で見聞きしたいろいろなものに興味を示し、見たり触ったり実際にやってみたりと研究熱心な姿勢が印象的でした。



研修員代表として京都府農林水産部 今西部長へ記念品を贈呈



原口専門家のお父様(右から2人目)にトラクター運転の指導を受ける

＜ベトナム人研修生から見た日本の交通機関＞

バイクが溢れる道を横断するのにもひと苦勞のベトナムの道路事情ですが、ベトナム人から見た日本の交通機関も驚きがあったようです。来日時に成田空港から羽田空港まで高速道路での移動を経験し、研修員からは「概して日本のドライバーはマナーがいいし、道はゴミも落ちておらず整備が行き届いていてきれい」と感心した様子でした。

研修中の移動や週末の自由行動は、バスに加えて鉄道も利用しました。JICA大阪の最寄り駅はJR茨木です。平日ラッシュ時には上下線4本のレールにはひっきりなしに列車が通過します。「あの列車は駅に止まるのに他は何故通過するのか?」と普通、新快速、特急の違いを説明するのも難しいですね。初めは緊張気味だった自動改札も徐々に慣れました。JR線だけでなく、地下鉄やモノレールなど様々な公共機関にも興味津々の研修員の様子がありました。



運転席後方から車窓を眺めるMr. Thuyen



ベトナムの国会で導入が討議されている新幹線にも乗車

*** 皆様のご意見・ご感想をお待ちしております ***
JICAマンヤン郡プロジェクト事務所

jicavn.my.office@gmail.com / 059-3839300 (project office)
http://www.jica.go.jp/project/vietnam/0701971/index.html (HP URL)